



助け合い推進会議会長賞

心地よい場所

高橋 美香(須坂市)

私は、昨年5月に第一子を出産し、初めての子育てを始めましたが、それは私たち夫婦が、夫の転勤でこの須坂市に引っ越してきたばかりの時でした。それまで住んでいた場所や、実家の親や友達からも遠く離れた新しい土地で、不慣れな育児を始めることになったのです。

夫は子育てに協力的で大変助かっていますが、仕事が忙しくて夜間勤務も多く、困った時に頼る人のいない環境で、やはり心細い思いがありました。また、「せっかく育児という新しい体験をするのだから、楽しい育児がしたいな。育児を通した新しい出会いも大切にしたいな」という、前向きな気持ちも胸の中にありました。

そこで、とりあえず保健センターに足を運び、育児関連の情報を求めました。すると、市内の育児支援センター等

の情報をもらうことができたので、「よし、全部行ってみよう！」と、さっそく出かけてみることにしました。

その中で一番大きな出会いとなったのは、子育てサークル「へそのお」との出会いです。チラシを見ただけで、電話一つせず、いきなり会場であるリーダーの倉石さん宅を訪ねて行ったのですが、同じ子育て中のお母さんたちに温かく迎え入れられ、とても居心地良く感じられました。

ここではみんなが仲間で、悩みがあってもなくても集まれるのです。悩みがある時には、ここで口にするだけで、その日のうちに解決されてしまいますから、不安な思いはすぐに消えてしまいます。また、越してきたばかりの私は、市内の地理や情報に疎かったのであまり遊びに出られずにいたのですが、お母さん仲間が「あそこに子どもを連れて遊びに行くといいよ」などと遊びの情報までくれるので、外出も増えました。

特にありがたく感じたのは、やはり自分が体調を崩したりした時でした。夫はなかなか家にいられないので、自分が倒れたら子どもはどうなるのかと考え、「絶対に倒れない」という思いがありました。しかし、一度入院した時には、お母さん仲間数名が毎日見舞いにやって来て、「買い物など、必要なことがあれば何でもするからね」と言ってくれたのです。近くに親や友人がいなかった私にとって、そのように声をかけてくれる人がいるという事実だけでも、頑張る元気と勇気を与えられました。

家に居て自分の具合が悪かったときも、夫が夜勤でおらず、子どもと2人きりで不安な思いでいると、倉石さんが電話をかけてきてくれて、「大丈夫？何かあったらすぐ行くから電話してね」と言ってくれ、涙が出てきたこともあります。

今、私のお腹の中には双子の赤ちゃんがいて、生まれる日を待っています。赤ちゃんを授かりうれしい気持ちでいっぱいでしたが、双子だと知った時は、長男がまだ1歳だったので、「3児の母としてやっていけるのだろうか・・・」と、同時に不安な気持ちも押し寄せてきたことを覚えています。その時、とっさに私の頭に浮かんだのは、「あ、これは倉石さん家に報告に行かなきゃ！」という思いでした。そして報告に行くと、みんなが「双子、大歓迎だよ！」と、喜んでくれたのです。ここに、これから生まれてくる双子を歓迎してくれる人たちがいる—そう思うと、肩の力が抜けていきました。

倉石さん自身も双子のお母さんであり、また、双子のお母さんたちが集まるグループにも参加させてもらえたので、双子が生まれるとどういう事が起き、どのようなことに気をつければいいのかなど、いろいろ話を聞くことができ、心構えができていきました。倉石さんは、自分が双子を産んだばかりの時は、買ってきてほしい物をメモにしておくと仲間が買ってきてくれたそうで、「欲しい物をファックスでもしてくれれば、家に届けてあげるからね」と言ってく

れています。

もちろん、まだ心配なことはありますが、このような仲間がいなかったら、長男と双子を自分一人でどうしたらいいのか見当もつかず、ただただ不安であったと思います。そもそも長男を育てるのにも、自分ひとりで部屋にこもっていたら、分からないことだらけだったでしょう。

この須坂市で子育てを始められたことは、私にとって本当に幸運であったと思います。「実家」のように感じられる居場所や仲間ができただけでなく、歯医者などに行っても、受付の方、見知らぬおじいさんやおばあさん、お婆さんたちが、私が治療する間、息子を見ていてくれるのです。倉石さんをはじめ「へそのお」で出合った仲間や家族のように温かく、見守り接して下さる支援センターの先生方、そこで親しくなったお母さん友達、里帰り直前に励ましのメッセージを届けに足を運んでくれた友人や、児童センターのみなさん・・・須坂に越してからまだ1年という短い期間に私はこんなにも多くの方々に支えられています。みなさんとの出会いに心から感謝しています。

そして、そういうことを考えていると、「ああ、子どもがいなかったら、こういう経験はできなかったのだ」と気づき、育児の苦労もありがたく感じられるようになりました。今までだったら、そんなふうに人に甘えることはできなかったからです。

また、優しく声をかけてもらうこと、助けてもらえるこ

とのありがたさを知ったからこそ、育児に多少慣れてきた
今、他のお母さん仲間が通院する時などに、「子ども、あず
かろうか？」と自分から声を掛けるようにもなりました。
これからは、そういう手助けもどんどんしながら、「双子が
生まれたら、もっとみんなに助けてもらおう！」と思っ
ています。そして今私たち夫婦は、3児の親となれる日を心
待ちにしています。

